

資料紹介 『園のはな』

小林勇

随分以前のことになるが、本誌第28号（平成五年十二月発行）に資料紹介として、『祇園新地 姉婦名譜 園の夜桜』を影印（一部翻刻を加える）して掲載した。その際該書について、「本書の序文によればこれより先に「園花」と題する芸妓の名寄があつたことになる。これも今日では伝存未詳であるが、幸い『守貞漫稿』中に「天保十年亥極月刊行園の花と云書に」として一部の透き写しとともに紹介されており、その実在を確認出来るとともに概要が知られる注¹」と述べた。その刊本を見るを得たので、前者に引き続きここに紹介しようと思う。但し前者には「花の枝折」と題する詳細な価付が附載されており、そこに花街資料としての価値を認めての紹介であったが、本書は純然たる名録であつて、そのような資料的価値には乏しいと言える。しかし本書も『国書総目録』や『古典籍総合目録』に見えない書物ではあり、先に紹介した資料と一対となるべきものであるので、その点に意義を認められよう。

本書を『園の夜桜』と比較すると、謂わば姉妹版のこととて、書型や表紙の模様など共通する部分が多い。そして前者について注意された点、即ちそれが、『天保佳話』や『風俗三石士』など安穴道人中島棕隱に関係の深い書物の出版で知られる蒙可楼の蔵版である点であるが、果然本書も蒙可楼蔵版であった。のみならず、前者で「編者申」とのみあつた凡例に当たる部分の署名が、本書では明瞭に「編者 蒙可楼主人記」とあり、蒙可楼が単に本書

の蔵版者であるだけではなく、編集者でもあることが明らかとなつた。多分『園の夜桜』の編者もまた蒙可楼その人であつたと思われる。もつとも、蒙可楼と棕隱との関係は未だ十分に明らかではない。本書の東籬亭主人の序文には、蒙可楼の京都人にして和漢雅俗に「心いたらぬ隈なき」ことが述べられ、棕隱に相應しいのであるが、それ以上には判然としない。この序文中「蒙可楼のあるしよから（良）大和の」とある部分が、（銅駄）余霞樓を掠めていふと思われるのはこじつけに過ぎようか。ともあれこの、棕隱との深い関係が想像される書肆の、これ又祇園花街関係の出版物の一つが知られることになるのは確かである。

猶、先に『守貞漫稿』を引用したが、今この刊本と『守貞漫稿』の記述とを対応させてみると、喜田川守貞の述べている本が底本と同じものかどうか疑問がなくもない。それは先ず『漫稿』には「天保十年亥極月刊行」とあるが、本書は内題左に「亥十二月改」とあるものの、刊記は「天保十一年子正月発行」とある（この刊記や広告は『園の夜桜』と同一版木を用いている）。これは内題左の記述に従つたものとも見られようし、又その記述や『園の夜桜』序文から、同一の刊記を持つてはいても本書が先行することは明らかであるから、或いはそれが実際であったかもしれない。しかし『漫稿』に「万屋安兵衛より万屋嘉吉に至り、置屋十二戸（注3）」とする記述は、置屋の戸数は同じであるが、本書では万屋安兵衛から始まって京井筒屋寅之助に終わっている（この順序は『園の夜桜』も同じ。これにより先稿に於いて或いは脱丁かとも推測した京屋喜兵衛店は當時娼妓を抱えておらず、最初から同書には記載されなかつたものと思われる）。この点疑問を存するが（もつとも『漫稿』のその前の記述より、この部分は本書掲載の順ではなく、置屋の所在地別に整理したものと考えられなくもない）、今他本を参照するを得ないので、これ以上深入りはしないこととする。

次に簡単に書誌を記しておく。

表紙 白地に藍で収載される置屋の商号を刷り込む。地紙の色を異にするだけで、『園の夜桜』と同一版木による

ものと認められる。七・三二糸×一五・七糸。

題簽 左肩。緋色地紙。子持ち枠。一部破損。「園のはな」。残存部約五・〇糸×一・三糸。

見返し 黄色地紙。飾り枠の中に「祇園／新地／歌妓／名譜／園花」。構成 序半丁、凡例半丁、名寄二十四丁半、廣告・刊記一丁。以上、全二十六・五丁。但し名寄せ部分は五丁が重複しており、正しくは二十五・五丁の筈。

柱記 序に「序」。以下はなし。○のみ。

丁付 序になし。名寄せから刊記にかけて「一」「五」「五」（重複）～「廿三」「廿四」。「追出目録」にはなし。

匡郭 四周单片。六・一糸×一四・一糸。

備考 序文のみ十六行の罫入り。名寄の「二」丁と「三」丁の間に封切紙を存している。

以下、紹介に当たっては、『園の夜桜』同様、序文、凡例、廣告・刊記（これは前書と同版であるが）は、上段に影印を掲げ、下段に翻刻を付す。名寄せ部分は影印のみを三段に掲げることとする（「五」丁の重複は勿論省く）。

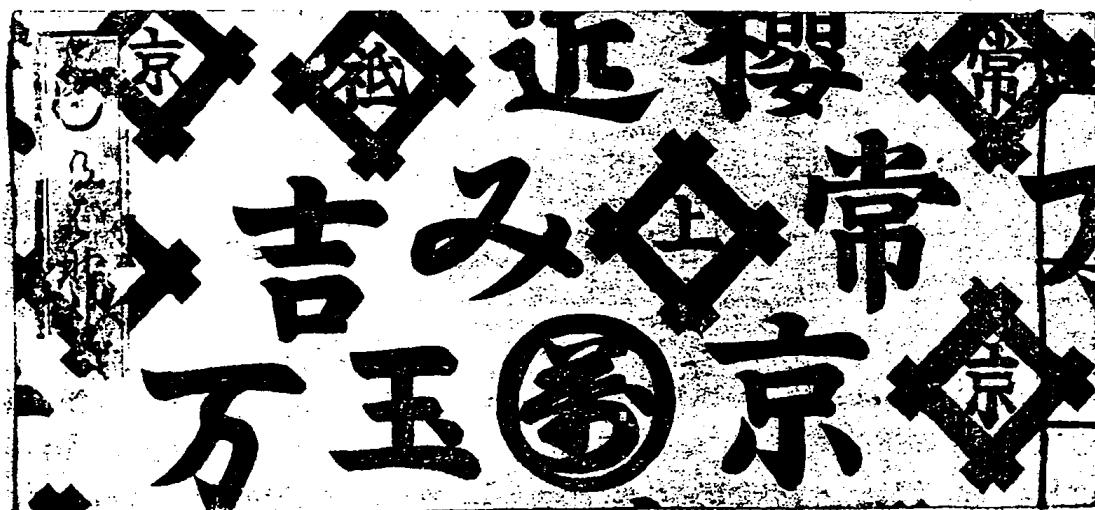
^{注1} ここに「透き写し」と述べたのは、刊本と対比するを得なかつた為の誤りであった。以下の影印と『守貞漫稿』を比較すれば明らかであるが、人名や記載順は一致するものの刊本で「きをん町」とあるところを「ぎおん町」、「万屋」を「萬屋」とするなど、『漫稿』は余り丁寧なども言えない書写の仕方をしている。又後述の如く、底本と同一の版本に基づくか否かにも多少の疑問はある。

^{注2} この人物は、読本等を多作した池田東籬であろうか。『園の夜桜』及び同書附載「花の枝折」の序者「桃李散人（桃李老人）」も音の一致から同一人物であろう。

注3

『守貞漫稿』の本文の引用は『合本影印自筆守貞漫稿』を参照しつつ、岩波文庫本『近世風俗志（三）』によつた。

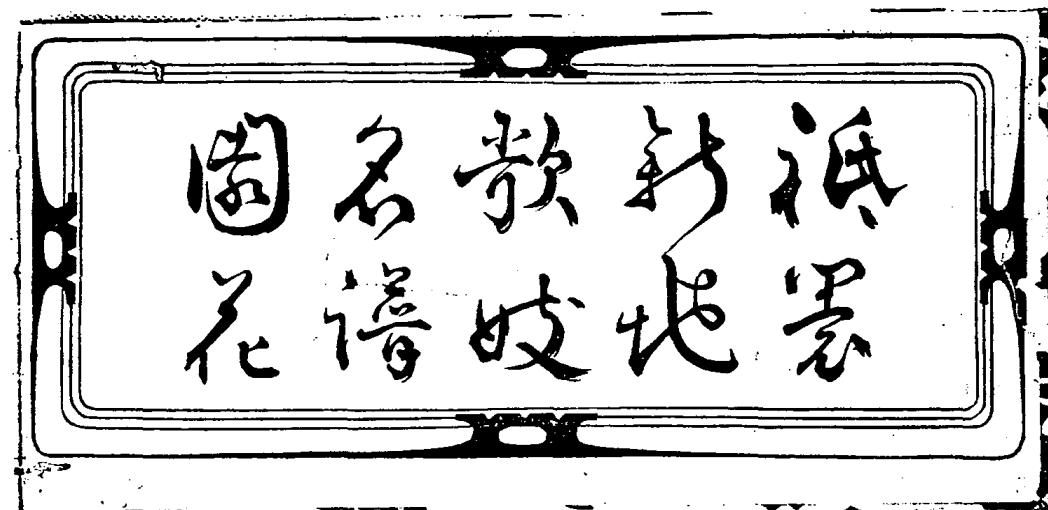
(表表紙)



(裏表紙)



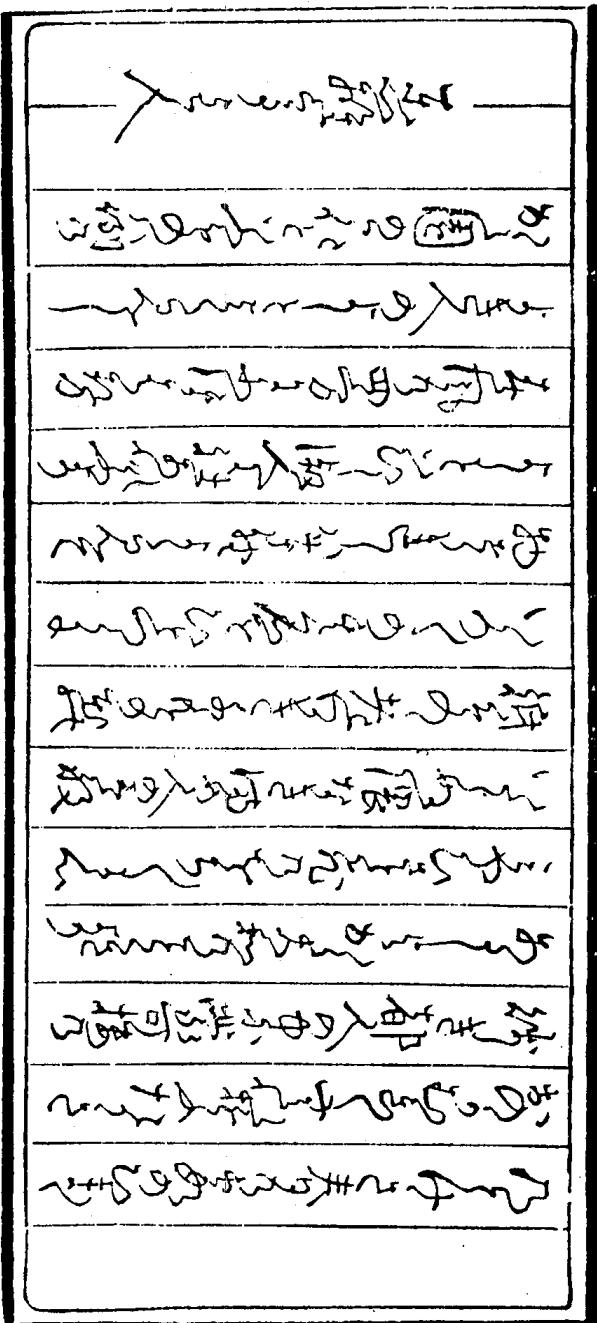
(見返し)



(序) 付し・オ

東籬亭主人

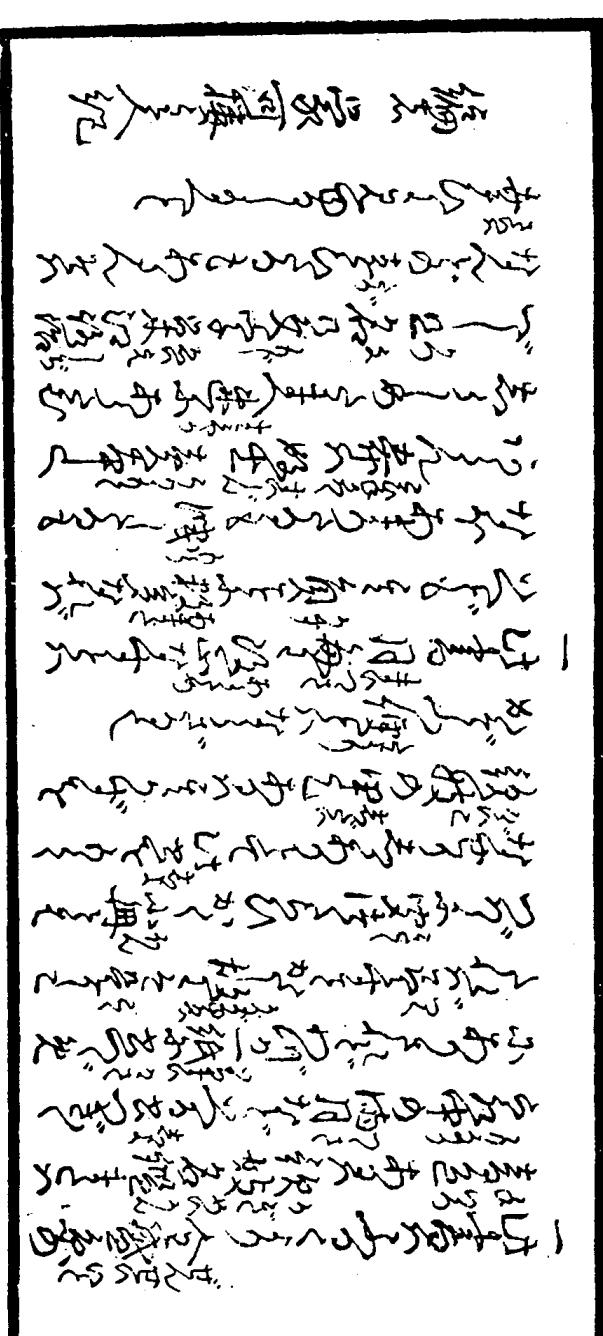
かみ園の花とおもひの例
よき人のよしよへ見し
春風の四方にはせせ
よしよしよしよしよし
せらしほ芳野よく見て
いりの其名をひとい
祇その老わかま千と花
いたぬ限なまめ人の今般
みやびひとひのやく心に
りよかよへといかよしる
職しき都人の中に蒙可樓の
おかむれ／むれ遊ふたかま
のとけき春の霞のひ／



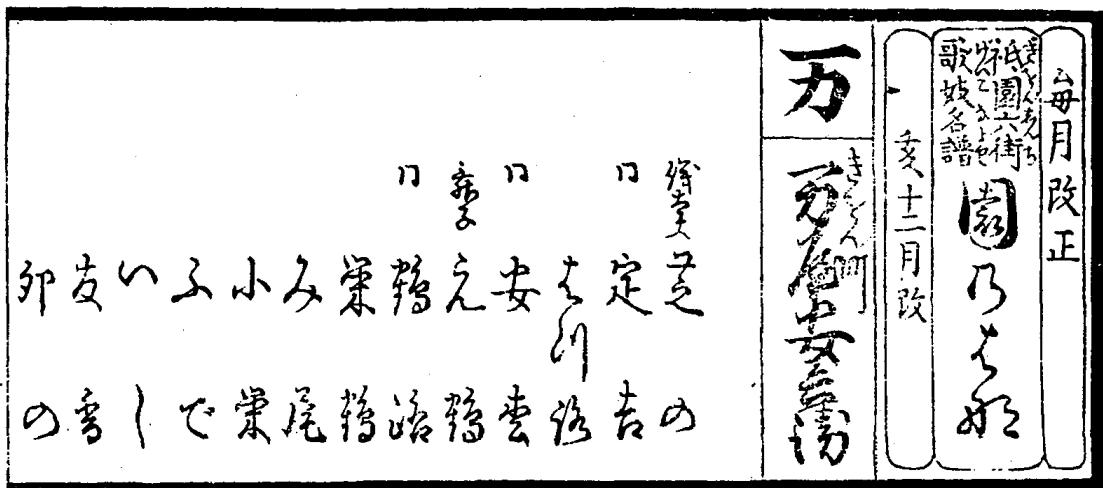
(例文・月・丁)

編者 蒙可樓主人記

幸に見ゆるし給へど、なんど運びたるあらんぞとは
此書の文字榮江路治し、且名の文字榮江路治し、
あん希は好士元本へ
此書月毎に改ざなすとは
かべて便はんがほんせ也
歌妓の甲乙あるは其かずを
なはりして此書をもて
は小冊へり聞ひ得
たるに是かして、故したまとい申題也
あらじ書に紙をかみたまふ
中最の譜用ひて、此書の音色あるは歌妓名鑑トカラシたは
此書并びに金鑑系の



(一・オ)



(一・ウ)

小小高一落さ小出利まで小や小組書き小小泣
八き う と う
まの葉落代や糸は葉んのすの松落のく葉松

(二・オ)

キキキ キ ヲ ヲ キ キ
小葉落葉は緑小葉毛友墨葉落葉然とかと重海
市者春苗う葉らのん葉葉の葉苗吉のく吉吉

キ		キ
(三・ウ)	久友兼小東芸小力置久 鷺右海里市兼久雲尾兼	小也く然

吉		
(三・オ)	房政英房辰密色 萬治浦尾兼業業	里里鶴歌梅 系秀賞榮喬

櫻		キ キ
(三・ウ)	波難 きく路	光之勢点小小や久小重 つと 吉の吉いろら紫屋様吉

(四・オ)

キ
キ

改めつゝ東進ゆま鶯小光をえ小鶯う羨麻あ小
吉ちみくト鶯のりう吉語な葉々松る拂霧菌友

(四・ウ)

キ
キ

から友ふ小を今幼き小鳥鶯う鶯や歌小聲
め さか こと の つ
風く枝鶯あり鶯活處と活處葉尾とるや絶

(五・オ)

キ
キ

鶯小鶯寅組ゑ然黙鶯墨八う鶯小
音吉語處吉のりう雪葉音あ葉梅



(五・ウ)

キ キ キ

キ キ

むせゑ久き小然ニ吾云久經常小奇ニ去去小黑弱
之ヲ
次ヲ代吉ニ去友去蜀去策弱去去策去吉葉ノ雲尾

(六・オ)

フ キ キ フ

キ

秀ニ少ニ政ニ小移ニ移ニハ種展花八束ニ篇ニ小矣ニ少ニ
つ つ
るニの二紅石高葉ニ薄弱葉雲活ニくニ雲紅葉

(六・ウ)

フ キ フ

政ニ八世ニ主ニ奇ニや枝君ニ移ニ小ゑニ已ニ友ニ富政ニ移ニ移ニ
や 異
のニ本ニの葉尾ニ葉二枝ニたま葉ニ葉二葉ニ

(七・オ)

下 下 下
お小(こ)さては八(は)くえかふる葉(は)やゑふほ(ほ)
ううるるる う やとつ
尾(お)のち尾(お)はえの葉(は)のまるく葉(は)きとの葉(は)せ

(七・ウ)

下 下 下 下
笛(ふえ)葉(は)きやき葉(は)支(し)八(は)とひふ葉(は)
ねゑねほ(ほ)き三(み)さト
葉(は)い活(は)活(は)鷺(さぎ)葉(は)る尾(お)の鷺(さぎ)尾(お)ひく

(八・オ)

キ キ キ
氣(き)を勇(いさ)み小(こ)弱(わ)く思(おも)ひ小(こ)弱(わ)く思(おも)ひ
て と て
の代(しろ)弱(わ)る吉(よし)尾(お)雲(くも)の思(おも)ひ吉(よし)尾(お)

井上處
井上處

八
八・ウ

ハ	ハ	キ	ハ
格格少君	ここあい絶室	まく	ふと
まき	ま代	ふと	と
わくらるよ煙草く松鷺と尾羽紫白んは世			勇

九
九・オ

キ	ハ	キ	ハ
扇小室	先く	こみ	然
う	の代や	う	代
玄友	下	葉青	青
玄	鷺	白	く
友	江	紫	鷺
玄	鷺	白	ん
友	江	紫	鷺

九
九・ウ

つ	行	之	多	く	小	豆	玉	王
ろ	と	と	ま	ま	と	と	玉	
苗	葉	多	多	多	葉	紫	白	
葉	鷺	煙	草	煙	鷺	白	青	
白	鷺	白	煙	白	鷺	紫	青	
青	鷺	青	煙	青	鷺	白	白	
青	鷺	青	煙	青	鷺	紫	紫	
青	鷺	青	煙	青	鷺	白	白	

(十・オ)

キ

キ キキ

ゑ八けま枝後尾虎沙まゑ由かく常秀琴琴はゑ
をうこ たろ めの葉葉沙多る葉尾乃葉葉吉吉沙尾
の葉葉沙多る葉尾乃葉葉吉吉沙尾

(十・ウ)

キテテ

小弓ゑ梅照は常とふこと小あ小刀もいよ死
る ろくくよくけはれ
ササ多葉沙多葉沙多葉沙多葉沙多葉沙多葉

(十一・オ)

京

京
本
屋
新
作
房

八十

キテテ キ キ テテ

のとみ重 小小山ふはる葉竹
ぬ葉葉いのひ沙吉吉沙葉葉

キ キ キ

(十一・ウ) 小猿小猿八景い石田光は久せ小黒さゑ庵アマツヤシ
うまさる十
の山の吉吉の聖川雲足路雲景のう雲景た路雲

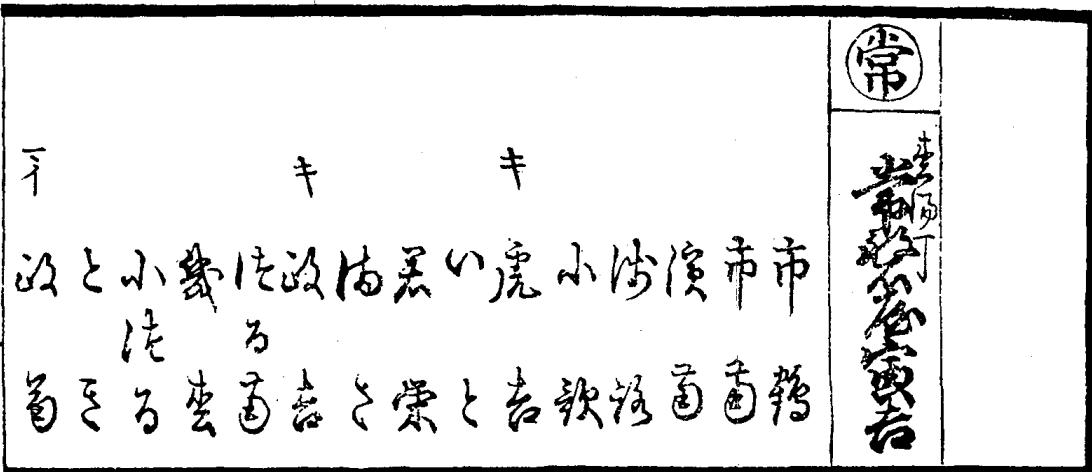
キ ハ キ キ

(十二・オ) 黒子庵民小政治や常された小小友友小梅君と小
猿吉雲景の勇さみ葉と川梅くろくう雲景を友

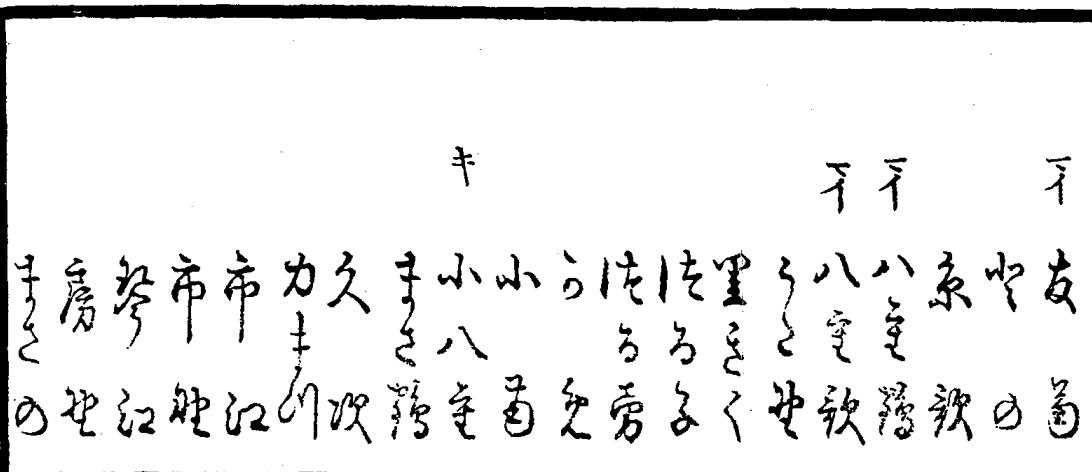
キ ハ ハ

(十三・ウ) み小小鶴小政政鶴小行ひよ景政小小黒光
ひそひそひそひそ
雲初くろろ景と無鶴鶴鶴と鶴鶴

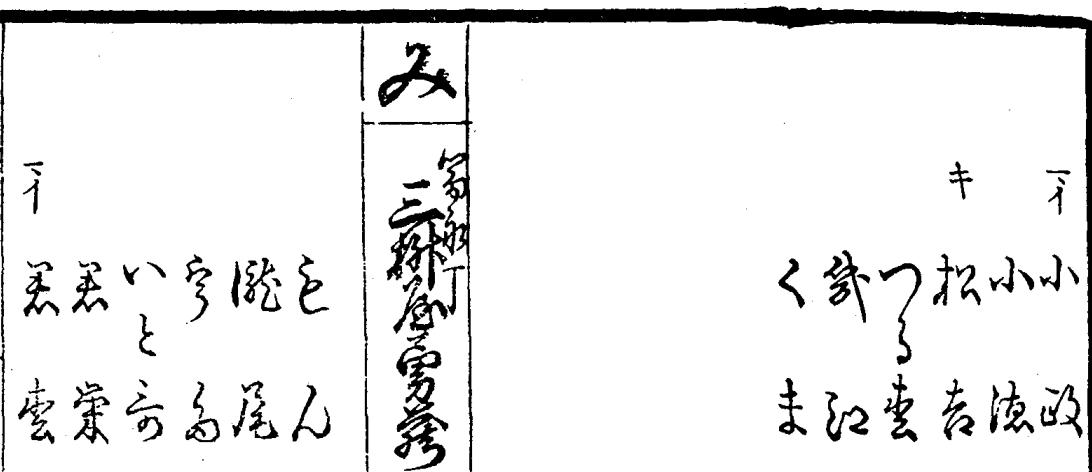
(十三・オ)



(十三・ウ)



(十四・オ)



キ キ

(十四・之)

友 ほ い う 小 滝 力 き 八 矢 小 小 小 い 然 う や 八 矢 力
る の き そ
ち の と 茶 道 客 屋 く き の 茶 道 客 を 告 乃 あ お う 代

キ ネ ハ ハ キ

(十五・之)

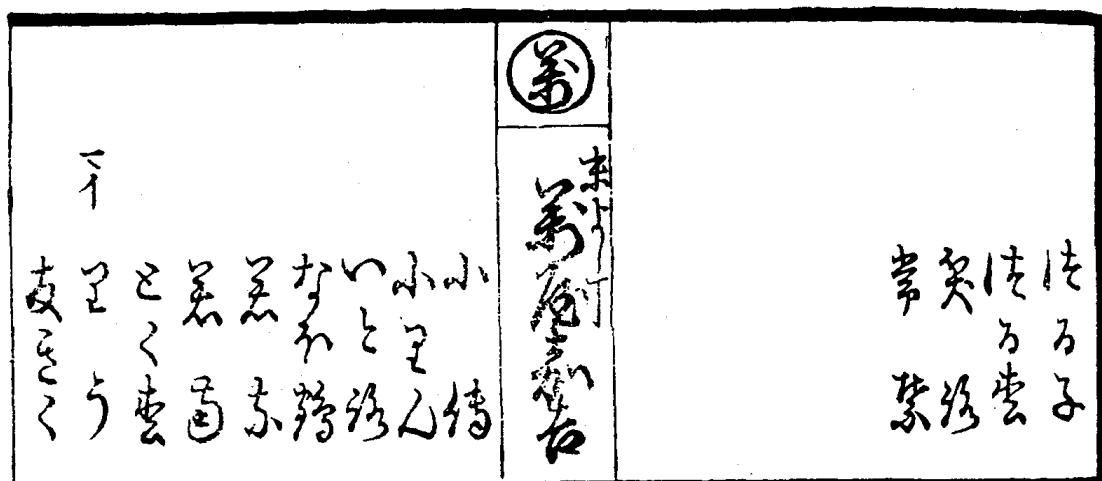
然 え 落 楠 さ 無 也 無 小 ほ ほ ふ い と 小 し し 小 無 無
の ま
の 客 修 の く い く 落 緯 あ お そ 修 を 素 く と 素 お お

ハ

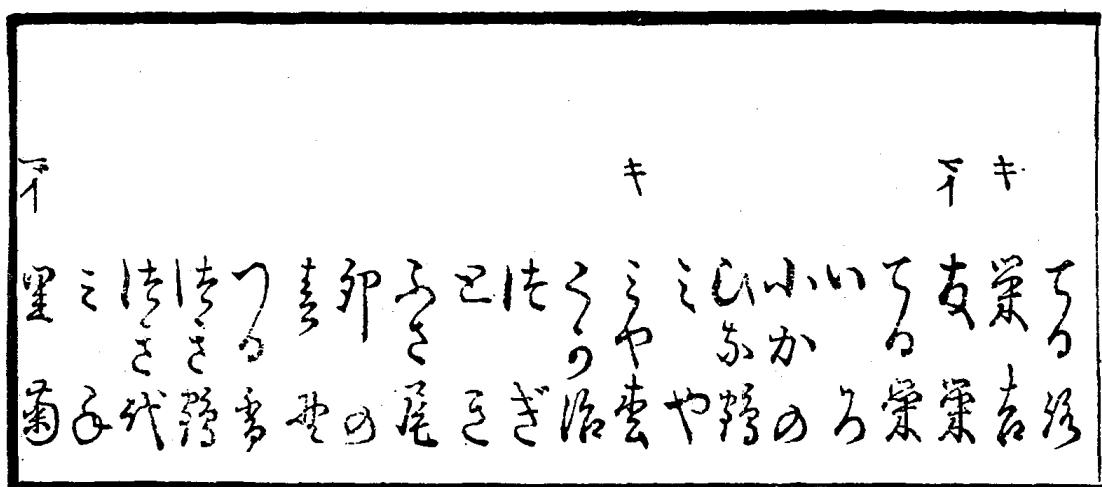
(十五・之)

茶 小 こ ふ す 小 う 小 友 民 亂 構 构 番 や き 番 里 そ 小
の う
告 う 修 く か た 修 あ く 尾 乃 事 修 修 そ ひ う す 乃 事

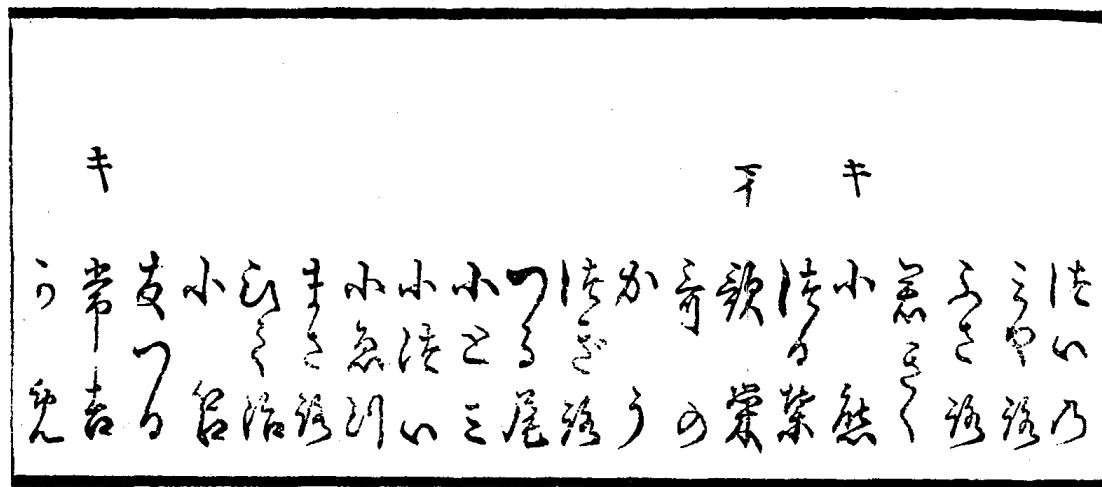
(十六・オ)



(十六・ウ)



(十七・オ)



(十七・ウ)

キ キ チ キ ハ
 桜扇子全然うほよ歎小小小小か志未未未未未
 せり
 花者修殊活者ろ是者秀緑展い薄葉薄のト雲乃

(十八・オ)

キ ハ キ ハ ハ キ
 云秀小豆之やう小豆様子うほ度候候候拘八雲
 々急々
 さ松系葉石雲移文案去薄葉い志案る雲の空吉

(十八・乙)

	近	
	近 シ 密 着	
八八卯小光小左葉 宇吉の云く葉		キ マ ヨ ミ シ ム テ ス ト シ ム テ ス

(十九・オ)

小葉正彦文と小野寺小竹は秀吉と曰ひを
す ほきと うる うる
宋修る吉くの吉葉み葉修落去代多々尾ん葉

(十九・ウ)

高麻八黒政よててて写そは奇友とかてあ花落今
まき まき まき まき
吉の道の吉多路西落葉吉吉ら葉る葉去代

(廿・オ)

あ葉落常ニ小少く落也麻多々小章勇之毒麻雲
此 之 之 之 之
いれ子雲まゝ勇乃はのうのくふ葉る葉去代

(廿・ウ)

小小まかと久良洗里小辰い琴うふう枝葉吹
候歸田紀を鶴吹る葉詩葉鶴葉葉道うた鶴乃葉

(廿一・オ)

乙つま民葉至小法然みみと小之志友文の小せ
くつまつづくい 四四とうゆ ほ志
くちがるる松ま吉葉を被鶴乃葉ら尾うまと

(廿一・ウ)

道道うお卯梅け若小里うや
の子 小
尾葉葉荷勇葉ん葉の道経道

(廿一・オ)

干 キ

キ

梅の花あひ玉枝薄神ゑみ野慈惠友小か
後葉薄う薄く葉青紫どりの葉苗葉薄葉



(廿二・ウ)

干

キ

玉さうち薄琴小小葉小竹葉多今薄薄行ふ小小
ならぬ薄葉ゑろ葉葉薄葉者代富葉度枝

(廿三・オ)

干

干 干

八葉生すま私葉いゆき小毛蓄は八八ううまの
主葉薄葉葉薄葉のののゑ紅四葉薄葉葉

(廿三・四)

や常鈎物は沙の友を勝敗較べたらおは紫と小
そめの雲尾のねるをろく薄の絲ら孫尾の玉陰

(廿四丁・五)

小あい
里いり

(廿四丁・ウ)

林 竹原好兵衛

書 二條通寺町西へ入

元 平野屋茂兵衛

壳 六角通柳馬場東へ入

本 吉野屋勘兵衛

製 四条通寺町西へ入

天保十一年正月發行

洛 蒙可樓藏版

所持し給ふへう鄙人は帰國の御土産に

図を添たれは此よりとにあるそふ人は

しるし猶その勝景を彩色せし

外古く名高き青樓を其町々に

芸者店いたいこ店ぞ居茶や其

細見にして道筋路次等を正図し

此図は祇園町井に新地六町の

同 さとの夕栄

祇園新地細見図

林書元
二條通寺町西へ入
賣木製
六角通柳馬場東へ入
天保十一年正月發行

洛蒙可樓藏版

同
祇園新地細見図

(丁付なし・オ)

よろしく奉希上候 売元白
いつも追々上木仕候御評判

細野 梅の魁 全

細宮 三千世の桃 全

地二条見川そひ柳 全

細西石垣 花の追風 全

園の花と一ひらにありますへ書き書也
して老若の三品をわかつて
こは遊女茶たて女の名よせに

同新地園の夜桜 全

定紋をつはりてしもしたる也
所々をしるし町々に舞妓の名
坊舍一軒茶やなんと名高き

勝景を一枚すりにして円山双林寺の
是書はさとの夕はえと同しく

細下川見真葛の栄

近影

追出目録

細見川原日出	細下川見真葛の栄	新地街	細石垣花の追風	地一条見川そひ柳	細宮三千世の桃	細野梅の魁	細見川原日出	細北野梅の魁	細宮三千世の桃	細見川原日出	細北野梅の魁
下川原日出形	下川原日出	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街	新地街
近影	形	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
是書はさとの夕はえと同しく	勝景を一枚すりにして円山双林寺の	所々をしるし町々に舞妓の名	定紋をつはりてしもしたる也	こは遊女茶たて女の名よせに	して老若の三品をわかつて	園の花と一ひらにありますへ書き書也	細西石垣花の追風 全	地一条見川そひ柳 全	細宮三千世の桃 全	細見川原日出	細北野梅の魁 全
近影	新地街園の夜桜 全	坊舍一軒茶やなんと名高き	所々をしるし町々に舞妓の名	是書はさとの夕はえと同しく	勝景を一枚すりにして円山双林寺の	園の花と一ひらにありますへ書き書也	細西石垣花の追風 全	地一条見川そひ柳 全	細宮三千世の桃 全	細見川原日出	細北野梅の魁 全